

阪谷芳郎の家庭教育

伊藤 真希

明治後期から昭和戦前期にかけて貴族院議員として活躍し子爵阪谷芳郎家を事例として華族の家庭教育について考察する。阪谷は漢学者を父に持ち、大蔵省官僚となり、その功績から華族に列せられた勲功家族である。また大実業家渋沢栄一と姻戚関係をつなげた。

阪谷芳郎の教育の目的は、子どもを社会の役にたつ人物に育てることであった。社会の役立つとは、女性は結婚し子供を産み育てて家族の再生産を行うこと、男性は仕事に励み家を富ませ国を富ませることである。阪谷はとくに学校よりも子どもが過ごす時間の多い家庭での教育を重要視していた。この家庭教育には非常に女性の負うところが大きいので、女性は良妻賢母としてよく教育していかなければならないと考えていた。この教育をになっていたのが妻琴子であり、阪谷家の子孫を見るにあたり、琴子がこの阪谷の期待にこたえていたことがわかる。

はじめに

阪谷芳郎は文官出身の勲功華族である。以前、大名華族の家庭教育について有馬頼寧を取り上げたり。本研究では明治以降に誕生した上流階級である勲功華族の家庭教育を取り上げるために、男爵阪谷芳郎(昭和16年子爵に陞爵)に注目した。

阪谷芳郎の関係資料としては、国会図書館憲政資料室に「阪谷芳郎関係文書」がある。阪谷にはビジネス、旅行、家庭と様々な日記を使い分けており、「東京市長日記」をもとに編纂された『東京市長日記』が刊行されている。また「阪谷芳郎関係文書」には家庭で起こったことを書き留めた「家庭日記」があり、その期日は明治17年から昭和16年にまで及ぶ。本文でも触れるようにその記述が断片的ではあるが、日記資料が長期にわたって存在しかつ利用しやすいものは多くないが、阪谷の資料は比較的利用しやすいものといえる。

また阪谷家は文官出身で国家に対する経済的な貢献で勲功華族となった実業家渋沢栄一と姻戚関係にあり、勲功家族のファミリーをなしているところにも注目したい。また明治期に日本の家族制度を築いた一人である民法学者の穂積陳重とも姻戚関係となっている。

阪谷芳郎には「家庭日記」がありながら、阪谷の家庭についての研究はいままで行われていない。資料を読み込んだところその内容は来訪者や家族の外出等に限られ、阪谷家の家庭に関する情報はわずかしかないが、伝記や阪谷の著書などとあわせて勲功家族である阪谷芳郎の家庭教育を研究し、華族社会の家庭教育に関する研究の幅を広げてみたい。同時に本研究は経済学の第一人者であり政治家や実業家として明治期・大正期に活躍した一人である阪谷芳郎の新たな一面を読み取る目的もある。

1. 阪谷芳郎の経歴

阪谷芳郎は文久三年(1863)1月16日に備中国後月郡西江原村(現岡山県井原市)に興讓館主宰の儒学者阪谷朗廬²⁾の四男として生まれる。母は恭子、兄の禮之介、次雄、達三、弟の時作の5人兄弟である。人となりは穏和で人当たりがよく眉目秀麗、また真面目で謹厳実直な面もあったようだ³⁾。

明治元年(1867)、朗廬が広島藩に藩政顧問として招かれたため、一家は広島に移る。明治3年朗廬のみ東京に移り、翌年の廃藩置県により朗廬は広島藩を辞す、5年正月には一家も東京に移るが生活は困窮していた、四月より朗廬は明治政府に出仕する。

芳郎は明治6年(1873)に父の友人である箕作秋坪の三叉学舎に入り、9年東京英語学校に入学、13年東京大学予備門を卒業する。明治14年(1881)朗廬が亡くなる。17年に芳郎は東京大学文学部を卒業し大蔵省に出仕、また専修学校⁴⁾や海軍主計学校で教鞭をとる。

明治21年(1888)2月26日芳郎は父と親しかった渋沢栄一の次女琴子と結婚した。このころ芳郎は会計法など財務に関する法律の整備に力を注いでいた。

明治27年(1894)日清戦争が勃発し、芳郎は日清戦争およびその戦後処理の財政計画にあたった。明治30年には大蔵省主計局長となり、32年には法学博士の称号を与えられ、34年大蔵省総務長官にまでのぼった。

明治37年(1904)に日露戦争が起きるが、芳郎は大蔵次官と臨時煙草局製造準備局長や臨時国債整理局長を兼任し、軍事費の調達および戦後の財政処理を行う。明治39年1月に第一次西園寺内閣の大蔵大臣となり、40年(1907)には日露戦争の軍事費調達での功績が認められ男爵となる。41年には大蔵大臣を辞任して大蔵省から去った。その後半年間外遊を行った。

明治45年には東京市長となり、大正4年(1915)に辞職している。その後は貴族院議員となる。大日本平和協会など各種団体の役員として活躍し、多くの会長職に就いているという意味で「百会長」と称されたという⁵⁾。また渋沢系の会社の役員としても活躍した。昭和16年(1941)に78歳で亡くなるが、死の数日前にいままでの功績から子爵に叙せられた。

2. 阪谷芳郎家の歴史

阪谷は子ども時代から学校の中で育ったといえる。家が漢学塾であったからである。そして家には数十人の塾生が寄宿しており、また朗廬をしたってやってくる客も多く、その世話は恭子の手で行われていた。けっして裕福な塾ではなく、家には人が多いながらも使用人を多用することはできなかったのも、家事のほほすべてを恭子が行うこととなったという。また自分の子どもたちの勉強をみて、朗廬の留守には塾生の監督までしていた。芳郎も母親の苦勞を感じて育ったようである⁶⁾。

明治5年東京に来てから、続々と阪谷家の子どもたちが亡くなって、芳郎一人が残った。しかし、明治20年(1887)に亡くなった朗廬の次男である次雄にはすでに良之進と陰次という息子がおり、良之進が本家を継いだ。芳郎の家は阪谷朗廬の家から分家したものである。

明治21年に琴子と結婚し麴町平河町に家を構えたことが芳郎家の始まりである。琴子との結婚で渋沢家や義兄穂積陳重との交流が深まる。琴子と穂積歌子は栄一の前妻であるちよの娘であったため、とくに穂積家とは親しかった。阪谷家の実家は岡山であったが、すでに朗廬や

兄弟も亡くなっており、東京における洪沢家と穂積家との親戚づきあいが非常に親密であったといえる。

明治22年1月には母恭子と亡くなった兄次雄の子どもたち⁷⁾を引き取った。しかし、恭子は芳郎の真面目な性格を窮屈に思い、明治32年に一家が小石川区原町(現文京区)に転居する際にもとの西片町の家⁸⁾に良之進を連れて出た。

明治22年5月に長男の希一が生まれ、翌年5月には長女敏子が生まれ、新しい家ながら芳郎家は大所帯であったといえる。さらに明治24年7月次女和子、25年9月次男俊作が生まれる。

明治29年(1896)2月三女八重子、30年7月四女千重子、34年9月五女總子が生まれ、芳郎は二男五女の父となった。芳郎は次々に子どもたちが生まれた時期は、日清戦争と日露戦争の財政計画などに携わっており、公私ともに充実した日々だったといえる。

明治43年(1910)3月長女敏子が堀切善次郎⁹⁾と結婚、明治44年4月次女和子が高嶺俊夫¹⁰⁾と結婚と娘たちが次々に家を出る。また、大正5年(1916)3月には東京帝国大学法科を卒業後日本銀行に勤めていた希一が三島弥太郎子爵の長女壽子と結婚する。同年4月三女八重子が中村雄次郎子爵の嗣子貫之と結婚する。大正7年ごろ八重子夫婦は貫之が勤める横浜正金銀行の支店のあった上海に住んでおり、芳郎は中国視察の際に立ち寄っている。大正6年には芳郎の初の内孫である正子、翌7年に朗子が生まれ、同年長男希一は名古屋へ転勤となり希一家は名古屋へ移り住む。大正9年には名古屋にて希一の継嗣である芳直が誕生する。

大正9年(1920)12月四女千重子が秋庭義清の弟義衛¹¹⁾と結婚し長崎に住む。同年、希一は妻子を東京に残してロンドンへ転勤する。大正10年6月22日敏子が病気で亡くなる。大正11年1月には京都帝国大学文科を卒業した次男俊作が結婚する。相手は洪沢栄一の秘書だった故八十島徳親¹²⁾の娘の文子で、夫婦は俊作が市立名古屋図書館館長として働くために名古屋に住んだ。

大正12年(1923)9月1日の関東大震災により和子が亡くなる。病気で寝込んでいたところに大地震が起こり心臓まひを起こしたものであった。

大正12年12月14日五女總子が伊藤長次郎¹³⁾の嗣子熊三と結婚し、兵庫に移り住んだ。

結婚後の子どもたちは自身のまた配偶者の仕事の都合から、東京で暮らす者がなかった。また次女の和子の子どもたちは東京にいたが、「母の歿後数年餘、私共は「原町」のすぐ近くに住みながら御無沙汰の日々を送った」というように和子の死後は疎遠になってしまっていた¹⁴⁾。

大正13年には母恭子が亡くなっている。

また同年には希一が日銀を退職し、関東庁に入り財務課長として旅順に赴任することとなり、希一家は中国へ渡った。希一は昭和4年(1930)拓務省勤務となりいったん日本に戻るも、昭和7年に満州国財務部に入りふたたび大陸へ渡る。

昭和6年4月には芳郎は脳溢血で倒れている。同年、義父である洪沢栄一が亡くなり、昭和14年(1940)10月26日には琴子が亡くなった。

3. 阪谷芳郎の家族

阪谷日記には阪谷芳郎の家族に対する言動や心情などを記していないために、その心のうち

の細かいところまでは読み取れない。たとえば、大正5年(1916)3月13日の長男希一の結婚に際しても「希一三島寿子ト結婚ス」、大正6年1月27日初の内孫である正子が生まれた際にも「寿子東京病院産科室ニテ女子ヲ産ス」とのみ記されている。

大正10年6月22日に長女敏子が病気で亡くなった際も「午前零時半堀切ヨリ電話アリ琴子總子寛子ト共ニ堀切敏子ヲ見舞フ午前六時終ニ死去ス」とたんとと日々の日記をつけている。しかし敏子の容体が悪化した10年5月31日から亡くなった22日の間に「堀切敏子ノ病ヲ訪フ」などの短い娘の病状を案ずる文が18回も見られ、日記には娘への心情について全く記載されていないが、22日間にほとんど毎日見舞いをする行為から、敏子への愛情をうかがい知ることができる。

また関東大震災で次女和子が亡くなった際には、琴子と總子が高嶺家の別邸で病氣療養中だった和子見舞いに出かけており、そのときの惨事の状況が仔細に記されていた。しかし、阪谷自身の悲しみの感情は文章上に表わすことはなかった。

最後に結婚した五女の總子の結婚の際だけ、感想のような一文がある。特に末っ子であった總子は可愛かったようで、名前も芳郎自身が当時の役職である大蔵省総務長官にちなんでつけている¹⁶⁾。その總子の結婚式が京都ホテルでとりおこなわれた際、芳郎は京都に泊った。その大正12年(1923)12月12日の日記には「俊作、千重子、總子、ト共ニ余夫婦同室ニ眠ル珍シキ事ナリ」と書いてある。子どもたちがみな結婚し自分の手から離れることとなり、芳郎にとっても感慨深い何かがあったのだろうと想像できる。阪谷芳郎は日記魔といえるほどに日記をつけ続けた人物だが、彼は家族にとって大きな喜びや悲しみがあつたはずの出来事であっても、そこで家族への思いを明確な文章で日記に書き残すことはなかった。

しかしながら、日記において几帳面につけられた来客や外出の記録からは、家族と過ごす時間を大切にしていたことが読み取れる。

〈表1~3 大正7年~大正9年の阪谷芳郎の家族との行動〉

大正7年(1918)	家族	妻	子ども
私的行事	34	0	6
公的行事	1	4	0
その他	4	3	5

大正8年(1919)	家族	妻	子ども
私的行事	35	0	1
公的行事	10	6	0
その他	6	3	0

大正9年(1920)	家族	妻	子ども
私的行事	32	1	1
公的行事	6	6	0
その他	7	5	2

※私的行事は家族(妻・子ども)とのプライベートな集まり、公的行事は冠婚葬祭や歓送迎会、その他は区別が判断しにくいもの(親類を交えての行楽、旅の見送り、見舞いなど)とする。家族とは妻と子ども(一人から)をともなつた行動のこととした。

上の三つの表は大正7年(1918)から大正9年の間に芳郎が家族と共にした行動を表にまとめたものである。

最も多い私的行事は主に家族での行楽となっている。一家は年末年始と夏休みには一週間から二週間ほど家族で大磯の別邸で休暇を過ごしており、すでに結婚して家を出た娘たちも孫を連れて大磯に来ている。また家族を伴っての観劇も毎月の恒例の行事であるようで主に帝国劇場に足を運んでいた。末娘の總子も17歳となり大人たちと行動できる年齢になっていたの、同居している子どもは全員がほぼ欠けることなく参加している。しかし、夫婦だけの外出はほとんどない。

一方、公的行事は妻の琴子と出かける場合が多い。これは媒酌人として結婚式に出席したり、葬式に参列したりすることが主立ったものである。また大正7年と8年および9年を比較すると、家族での公的行事への参加が大きく増加している。これは大正8年には長男である希一の配偶者である寿子の父である三島弥太郎¹⁷が死亡したことや、芳郎の母である恭の米寿の祝いがあったためである。そして大正9年には義父である渋沢栄一の80歳の祝いや子爵への昇爵の祝い、また四女である千重子の結婚があったためである。このように近親関係での冠婚葬祭が多かったことが理由である。

以前に研究した有馬頼寧と比較してみたい。このころの阪谷は55歳、有馬は35歳であり、二人の年の差は20歳ほどあった。しかし、阪谷の末娘と有馬の長男長女は同世代であり、同じ年頃の子どもを持つ親という共通点があった。阪谷の外出を表にした同時期の大正8年から9年の「有馬頼寧日記」によると家族と行楽に出かけたのは、大正8年が15回と大正9年が4回となっている。有馬はこのころ愛人との恋愛に忙しく、また仕事も東京大学農学校の講師として大学に勤めたり、信愛夜間中学の設立に奔走していたりと忙しく、家族と行楽などに出かけることはあまりなかった。

一方で阪谷はこのころ毎日職場にいかなくてはならないような仕事はなくとも、さまざまな財団法人や政府の委員会また渋沢系の企業経営に参加していた。このように阪谷は忙しい中でも、家族揃っての外出を非常に大切にしており、とくに毎月のように出かけていた観劇には以下のような目的があった。

又幾ら温順なのがよい、社會に悪風があると云つた處で全くの世間見ずでは困る。例を挙げると彼の芝居の如きも悪弊があるからと云つて、頭から見物をさせないと云ふのも考へ物である。余は矢張り常識の涵養と云ふ點から芝居にも連れて行く、只其機会に觸れて、彼はあゝであるからいけない。之はかうであるからいけないと一々芝居そのものなり、又は見物の人々になり就いて注意を与える。一利一害は物の免れないものであるから、害の處はこれを善用し、訓戒の材料として貰ひ度いと思ふ。¹⁸

このように、学校だけでは養えない常識を学ばせるために、阪谷は家庭教育の一環として子どもたちを観劇に連れて出かけていたことがわかる。

また、琴子は芸術を愛好していた人物であった¹⁹。中でも特に歌舞伎などの芝居の旧劇が好きだったという。阪谷家の恒例の観劇は琴子の趣味であることから、芳郎の妻への家族サービ

スという意味合いも大きかったと考えられる。

4. 『家庭の経済』からの家庭教育観

阪谷は東京市長を辞職した大正4年に『家庭の経済』を発行した。この本の発行の経緯は資料を欠いていてよくわからない。しかし、この本の編者菊池暁汀は一家の主人と主婦として熟読して、一家を長期に存続させていく知恵をつけてほしいと述べている²⁰。後述するように、阪谷は一つ一つの家族の長期にわたる繁栄が、国家の長期にわたる繁栄の礎だと考えていた。

この『家庭の経済』の奥付の題名には「実用」とはないが、表紙には大きく「実用」と書かれている。しかし、内容からして家庭の経営を効率的に行うような実践的な知識を与える目的で書かれたものではないようである。

まず経済学はどのようなものかというガイダンスの部分があり、本題としては外遊した際に感じた日本社会と欧米社会の違いを述べている部分と、家庭での女性の役割と子どもの教育のあり方を述べている部分の二つである。いわゆる家庭についての教訓的な啓蒙書というものである。

強く述べられていることのひとつとしては、西洋と日本の文化を比較しつつ、日本の国家の基盤は家族であり、家を富ませることは国を富ませることであるということである。

阪谷は、西洋人と比較して日本人は仕事に対するの尊敬の心が低く、そのためどんな分野の仕事に就いている人も、自分の仕事が効率的にできるか考えて働くことができないと述べている。つまり阪谷は西洋をみならい、効率的に仕事をして家を富ませ、さらに国家を富ませよと述べているのである。

また「日本臣民として此の萬世一系の天子を何處迄も奉戴することは、二千五百年の日本の萬世不易の善美なる制度であつて、此の精神を何處までも家庭に於いて植ゑ付けなければならぬのである。また家族を維持することを教へ」²¹るように努めなければならないと述べている。家族の維持とは夫婦の維持だけでなく、子どもを作り育てて、家族の再生産をしなければならないということである。

この部分から、阪谷が天皇を頂点とした家族国家の思想を持っていたことがわかる。

もうひとつは家庭での女性の役割と子どもの教育のあり方である。

阪谷によれば「生まれて相當の年齢に達すれば、他に嫁し子女を育て、一生を終る、これを婦人の標準」²²としている。そして、一家に良妻賢母がいれば、一家は安泰と述べている。家庭の主体的な運営は女性にあるとして、良妻賢母を育てていかなば家が成り立っていかなくなるということである。

また阪谷によれば「婦人が主として行ひを慎しみ、身を以て家庭を率ひて行くと云ふ考へを持たなければ、家庭は治まるものではない」²³という。また女性が高尚になって、家を先導すれば、おのずと男性も高尚になっていくともいう。阪谷は家庭生活が楽しくないから家に妾を呼ぶ男などが現れるのであって、女性が家庭生活を楽しめるものにすれば、そのような乱れた男性はいなくなると考えていた。なぜか男性への非難の矛先を、女性にすり替えている。

しかし、一方で旧来的な女性の教育はやめて、女性も社会進出をすべきだと考えている。ここの社会進出とは職業を持つことではなく、西洋の女性のように男性を助けて社交社会に進

出せよというものである。阪谷のいう社交社会というものは慈善事業を手掛ける女性のネットワークを作るということである。

琴子は慈恵医院婦人会に入り慈善活動を行って、皇后から上野慈恵病院常置幹事を任命されている。これには琴子の意思というよりも一族の意向という雰囲気もある。琴子だけでなく穂積歌子と栄一後妻の兼子も慈恵医院婦人会に入会しており、彼女たちの名義での寄付だけでなく、栄一も多額の寄付をしていた。これは渋沢栄一の母親えいの慈悲深かった性格が一族に大きく影響しているという²⁴⁾。このように阪谷家では琴子が女性の社交社会を実践していた。阪谷のこの女性への役割の期待は、西洋の貴族にならって、皇室や華族の女性の役割として期待された慈善事業の参加が根底にはあるように思う。これを華族だけでなく中産階級にまで広げていくことが必要だと阪谷は感じていたのだろうと思う。

また阪谷は家庭での教育は主婦が担うものとしている。同時に子どもは学校よりも家で過ごす時間のほうが長いので家庭教育は非常に重要だと考えていた。家庭教育で西洋に見習うべき点として、大人と子供の区別をするべきだとしている。この区別とは主に衣類や食事のことである。

これは阪谷だけの考えではなく、穂積家では実践されていたようである。穂積重行によれば²⁵⁾、子どもは普段は子ども部屋で食事をしており、親子な中は緊密であるが、大人と子どもの区別があり、これは陳重が洋行でみたアッパー・ミドルの生態を採用したとしている²⁶⁾。子どもの教育について阪谷家が穂積家を参考にしていたことは大いにあるだろう。しかし、日本の大名華族の家では旧来から食事は子どもだけで取ることは、西洋の方法を採用しなくても行われてきたことである。阪谷はこの大人と子どもの区別のある家庭教育で子どもの自立心を育て、将来の職業意識に役立てさせようと考えていた。

また阪谷は男子の教育のあり方は放任主義であるべきで、悪いところがあれば矯正していけばよいとしている。しかし、女子の教育は両親が作った型にはめ込むように常に躰けていかなければならないと述べている。これは、阪谷が男性が社会に出て世間にもまれることで精神が発達するが、女性は社会に出ないために心が狭くなってしまう、と考えていたことにも関係があると思われる²⁷⁾。

阪谷があげた女子教育のポイントが5つある。①卑しい言葉は使わせない。②卑しいものは見せない(小説、落語、ゴシップ記事など)。③夜は一人で外出させない。男性と二人きりにさせない。④俳優などのファンにさせない。⑤芸妓や妾娼を無視して付き合わないようにする。というものである。

①から④の場合は個人の家庭での教育であるが、⑤で芳郎は法的に芸妓や妾娼を法的に処罰し根絶するということまで言っている。⑤は廃娼運動であり、家庭教育にはとどまらない社会運動²⁸⁾である。これが同一の問題として語られているのには理由がある。阪谷は維新以降の教育が西洋風と日本風とまたその折衷で、親たちの教育方針の大筋が一致していないことを憂いでいた。そのために、女性の教育がうまくいかず、昨今は女性の礼儀作法などが乱れていると考えており、それを社会の問題としてとらえていたところがある。

阪谷は女子教育での一番大切なことは、将来どのような職業の夫にでも、どのような舅姑と小姑にでも仕えられるように育てなければならないとしていた。すべての女性が主婦としての

同様の教養を持つべきであり、社会は同一の意識をもっている必要があると考えた。阪谷なりに社会が持つべき意識を5つ提示したのだろう。

阪谷の問題点として、女性教育のポイントとして廃娼運動をとりあげておきながら、その部分の知識が非常に浅いことである。売春婦について道德問題として切り込み、立ち直った人でさえ排斥して交際するべきではないと説いているが、売春の背景には貧困という経済問題があることから目を背けている。

阪谷は真面目な人物であって女性問題をおこすような人物ではなかったため、売春婦の悲哀には実際に触れることはなかったのではないかと考えられる。有馬頼寧と比較すると、有馬は昭和2年に娘たちと旅行した際には「いやしい職業だといふても、それは其人の罪ではない」²⁹⁾と芸妓を見せており、その理由は偏見や差別の目を取り除くためだという。そこには妻が愛人や妾の面倒を見る事が華族社会および武家社会の習慣があったため、結婚すれば娘たちにもそのような妻の役割が期待されるようになる可能性があるために、芸妓を見せるというのも有馬なりの教育だったと考えられる³⁰⁾。

しかし、渋沢家には大内くにという栄一の妾がいたことがあり、くには栄一との関係の解消後も渋沢家や穂積家に入出入りしていた。また栄一の後妻である兼子も家の没落のために芸妓をしていたときに渋沢と出会ったという過去がある。元芸妓や元妾娼と付き合わずに一族として生活できるわけがない。実際に阪谷がくにと兼子の二人を嫌っていたか、資料を欠いておりわからないが、阪谷家と渋沢家の実態からは矛盾している。

また家を富ませるには家の支出を見直す必要があると阪谷は言う³¹⁾。しかし、阪谷は無職となったときでさえ外出時や帰宅時に玄関に使用人を並ばせてお辞儀をさせるというまるで江戸時代の大名のような習慣をやめなかった。無職でこの生活を維持していくことは経済的に苦しいだろうと、義父渋沢栄一に心配されて就職の斡旋をされたほどである³²⁾。このように『家庭の経済』には阪谷の実際の生活とは多少矛盾をすることも記述されている。

これらからわかることは、阪谷にとって家庭は、女性の場所であると同時に、その場所は男性にとって快適であるように整えるべき場であるということである。いわゆる良妻賢母主義である。阪谷は国家の第一線で働いてきた多忙な人物であり、家庭を顧みて特別に何かすることは難しく、家庭のことは琴子に任せてきたようである。

5. 『しのぶのつゆ』から見る琴子

阪谷家を仕切ってきた琴子に注目したいと思う。阪谷の日記の中からは妻である琴子の性格についてよくわかるような記述はない。琴子の追悼集である『しのぶのつゆ』³³⁾は琴子の死後阪谷を元気づけようとして、子どもたちの発案で編纂され、執筆は家族とごく親しいものばかりである。この『しのぶのつゆ』には琴子の母親としてまた祖母としての様子が記されている。

琴子は明治3年(1870)東京の湯島で誕生する。父親は渋沢栄一、母親はちよ³⁴⁾、夫妻にとっては二人目の子どもであった。すでに7歳上の姉歌子がいた。明治5年には弟の篤二³⁵⁾が生まれた。このころ栄一には大内くにという妾がおり、妻妾同居の状態であった。

明治15年(1882)に歌子は穂積陳重との結婚後、深川区福住町の渋沢邸の別棟にて生活を始めた。同年、千代子が亡くなり、このときから歌子が妹と弟の母親代わりとして世話を焼いた

という³⁶⁾。しかし、翌年には栄一が伊藤兼子と再婚した。明治 21 年(1888)琴子は 17 歳で阪谷家に嫁した。

『しのぶのつゆ』にて琴子の資質として語られるのは、非常に頭がよく理知的で記憶力があつたということである。そして多岐にわたる話題に富んだ会話のできた女性であつた。また阪谷の仕事の関係で外国要人と会うことがあるために、英語の勉強も行ってたようだ。

残念ながら、子どもたちは幼いころの母親の思い出を追悼文では述べていない。

しかし、四女である千重子の思い出として「私達姉妹に、あまり上京をお許しになりませんでした」³⁷⁾というものがある。亡くなった二人の娘は東京にいたが、そのほかの子どもたちは結婚後は遠方に住んだ。希一と八重子は海外に、俊作は名古屋、千重子は長崎、總子は兵庫である。当然、琴子にも寂しく会いたいという気持ちはあつただろうが、一家の主婦が長く家を離れることはよくないことであり、旅の最中に子どもが病気になっては大変だという配慮があつたからこそその態度だったという。

孫の中では特に芳直が可愛がられていたようだ。それは地理的な要因も大いに関係している。晩年にもっとも近くに住んだ直系は芳直であつた。昭和 4 年の希一のいったんの帰国から、昭和 7 年にふたたび中国へ渡るときには、芳直一人が学校に通うために東京に残り寄宿生活を送つた。彼は休日ごとに原町に祖父母を訪ね、祖父母と話し、ご馳走を食べ、ときには小遣いをもらつて帰つていた³⁸⁾。芳直にとって博学で議論好きな祖母琴子との会話は楽しかつたようである。

一方で、琴子は親せきの子どもなどの養育にもあつていた。琴子は結婚後すぐに、姑の恭とともに本家の良之進と陰次の養育にあたることになった。またこのとき既に、阪谷側の親類である山成喬六³⁹⁾が書生としており、また数年後渋沢側の親類である渋沢元治⁴⁰⁾を書生に預かることとなる。彼らを預かつていた時期というのは、阪谷は大蔵官僚として多忙であり、家のこと一切は琴子に任せきりだったという。

上記の三名は身体が弱かつたようで、阪谷良之進は自らを蒲柳の質といい、山成喬六は 10 代で脳溢血になって、渋沢元治は胃腸が弱く大腸カタルや腸チフスにもなつた。琴子の思い出として『しのぶのつゆ』、彼らは療養生活の中での琴子の愛情に触れている。琴子は自ら看病をしたり、また使用人に細かに命じたりして、彼らの生活に配慮したようである。それは阪谷家に寄宿していた間だけではなく、彼らが阪谷家を出たあともさまざまな心配をして世話をしていたという。

芳郎も幼いころから漢学塾での母恭子の働きぶりを見てきたことから、当然琴子にも恭子同様の働きを期待しただろう。また結婚当初は恭子が同居しており、琴子にとってはその存在も助けになつたであろう。

これらのことから、琴子が寄宿した親類の子どもたちまでにも細やかな心配りをわすれない性格であり、しっかりと家事をこなしていたことがうかがえる。

まとめ

阪谷の日記には家族との観劇の記述や夏の大磯旅行など、家庭サービスも多い。それはただ単に楽しむだけでなく、教育という視点からの社会見学という要素も大きかつたことが分か

った。ただ目的の場所やものだけを見るのではなく、そこにいたるまでに遭遇するさまざまな事柄も体験させることが目的であったといえる。

もちろんこれは家庭サービスでもあり、頻繁に家族で外出するという阪谷家の仲の良さも伝わってくる。

『家庭の経済』では阪谷の家族の理想像やそこに達するまでに必要な教育の仕方などがふんだんに描かれていた。それは阪谷が家庭教育を大切だと感じていたということである。子どもの教育の目的は国を富ませることであり、社会に役に立つ人物を育てることであった。女性は結婚し子供を産み育てて家族の再生産を行うこと、男性は仕事に励み家を富ませ国を富ませることである。阪谷はとくに学校よりも子どもが過ごす時間の多い家庭での教育を重要視していた。

阪谷家において、ひとつ家庭教育において効率的であった部分がある。それは芳郎も琴子は生まれた家が伝統的な武家とは違うことだ。阪谷家は漢学塾であったし、洪沢家は豪農であり、家格は高くない。またそれぞれの親類は東京には少ない。そのため阪谷家は家庭についての裁量権のほとんどを夫婦二人が握っていたと置いていいだろう。

伝統的な生活パターンを持っていた大名華族では、つねに古い使用人たちの意見を尊重しなければならない部分もある。実際に有馬頼寧の家では家庭内のことは女性使用人のトップである老女が取り仕切っていた。有馬家本邸から別邸に出た際には有馬の考えを入れることもできたが、やはり使用人を頼りにしており有馬の意思だけでは家庭内のことを変えることは難しかった。妻の貞子は子どもの養育にもあまりかかわらず、息子頼義に「おふくろは、一度だって自分の子供を育てたことはない人だ」⁴¹⁾と評され、頼義をはじめとする子どもたちは老女であった岩浪稲子⁴²⁾に育てられた。

阪谷家には古い使用人による窮屈さはなかっただろう。そのため家長による西洋風の教育の採用という考えと、使用人による旧来通りの教育の実践という矛盾する基本方針が存在し、家庭内での教育に対する混乱が生じることはあまりなかったと考えられる。つまり、夫婦がよいと考える教育方法がそのまま子どもに実行できたのである。

阪谷は女性の教育は良妻賢母となるべく親がきちんと型にはめなければならないと説いた。阪谷の理想通りに娘たちはみな結婚し子どもを産み育てた。娘たちの子どもである堀切治雄は日本鋼管社長であったし、高嶺秀一は通産省に入庁し東洋パルプの役員を務めた。阪谷の娘たちは父の理想通りに社会で役に立つ人物を育てたといえる。

また、長男の希一は日本銀行から植民地官僚として活躍した。また兄の代わりに阪谷が育てた阪谷良之進も文部省の技官として歴史的建築物の保存修繕に尽くした人物である。また希一の嗣子である芳直は日本銀行および日本輸出入銀行で活躍した。

阪谷は子孫から社会の第一線で働く人物を輩出したのである。また面白いことに、芳郎直系の長男は経済学を学び、阪谷家の家業ともいえる経済・金融政策に関わる仕事をしており、父親の職業を尊敬していたことがうかがえる。阪谷自身も謹厳で実直な性格であったとされるから、子どもたちや孫たちも父親や祖父を尊敬することができたのだろう。

阪谷家の家庭教育については、その目的は達成されており、成功だったと評価してもよいはずである。

しかし、実際には多忙な阪谷にかわり家を取り仕切っていたのは琴子であった。阪谷は女性は家庭、男性は仕事という性別役割分業を考えていたので、家庭教育についても琴子への期待は大きかったはずである。琴子はその期待にこたえていたはずである。これは琴子が『家庭の経済』で述べられた女性の役割としての、妻として母として家庭を整えて、慈善活動にも参加しているところからもわかる。まさに阪谷が述べたよい女性の手本となるような人物だったのだろう。家庭教育でいうところの阪谷の家庭教育の成功については、なによりも琴子の手腕が大きかったはずである。

なお本稿を草するにあたって、貴重な資料をお貸しくださった阪谷綾子様にお礼を申し上げます。

注

- 1) 伊藤真希「華族の家庭教育—有馬伯爵家を中心として—」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告第4号』愛知淑徳大学現代社会研究科 2009年
- 2) 阪谷朗廬(1822-1881)漢学者。
- 3) 阪谷芳直『三代の系譜』みすず書房 1979年 参考
- 4) 専修大学の前身であり、明治13年(1880)に設立された。
- 5) 故阪谷子爵記念事業会編『阪谷芳郎伝』私家版 1951年
- 6) 阪谷芳直『黎明期の女性たち』私家版 1984年 14頁参考
- 7) 阪谷良之進と隄次。良之進は美術学校を卒業、その後文部省技師となり寺社保存に貢献。隄次は夭折した。
- 8) 阪谷芳直『黎明期の女性たち』私家版 1984年 22頁参考
- 9) 堀切善次郎(1884-1979)内務官僚。現在の福島県飯坂町出身。兄は政治家の堀切善兵衛。敏子の死後、大正12年には20歳の内務省職員と再婚した(『読売新聞』朝刊 1923年8月12日)。
- 10) 高嶺俊夫(1885-1959)物理学者。教育学者の高嶺秀夫の二男。
- 11) 秋庭義衛(1892-1976)会社経営。ゼーゼル機器顧問。埼玉県比企郡出身。
- 12) 八十島親徳(1873-1920)長く渋沢栄一の秘書を務めた。
- 13) 伊藤長次郎。第三十八銀行頭取。
- 14) 増田孝子「祖母上の御死去を悼みて」阪谷希一編『しのぶのつゆ』私家版 1940年 88頁 14行引用 増田孝子は和子の娘。
- 15) 寛子は堀切家の長女。このとき、母が病氣なうえに弟二人も麻疹だったため、妹の英子と福子とともに阪谷家に預けられていたようである。「家庭日記」大正10年5月22日より
- 16) 穂積重行編『穂積歌子日記』みすず書房 1898年 615頁参考
- 17) 三島弥太郎(1867-1919)子爵。銀行家。貴族院議員。横浜正金銀行頭取から日銀総裁となり、現職のまま死去。
- 18) 阪谷芳郎『家庭の経済』大学館 1915年 186頁 7-10行引用
- 19) 阪谷希一編『しのぶのつゆ』私家版 1940年
- 20) 阪谷芳郎『家庭の経済』大学館 1915年「編者言」参考
- 21) 前掲 178頁 2-5行引用
- 22) 前掲 152頁 12行-123頁 1行 引用
- 23) 前掲 148頁 2-3行引用
- 24) 松田誠「東京慈恵会と澁澤栄一」『高木兼寛の医学東京慈恵会医科大学の源流』東京慈恵会医科大学 2007年 参考
- 25) 穂積重行編『穂積歌子日記』みすず書房 1898年
- 26) 同上 32頁参考
- 27) 阪谷芳郎『家庭の経済』大学館 1915年 162頁参考
- 28) 阪谷が廃娼運動を加えたのは、当時廃娼運動の全国組織である廓清会が発足されたばかりであり、廃娼運動の機運は高かったからだろう。
- 29) 尚友倶楽部・伊藤隆編『有馬頼隆日記』第2巻 尚友倶楽部 1999年 485-486頁(昭和2年8月19日)引用
- 30) 有馬の愛人は芸妓の福田次恵であり、自分の死後は妻の貞子に愛人の面倒を見て欲しいと思っていた。有馬の祖母は夫の死後も夫の愛人と付き合いがあった。

- 31) 阪谷芳郎『家庭の経済』大学館 1915年
- 32) 故阪谷子爵記念事業会編『阪谷芳郎伝』私家版 1951年
- 33) 阪谷希一編『しのぶのつゆ』私家版 1940年
- 34) 旧姓尾高ちよ。千代、千代子とも。尾高勝五郎の娘。栄一とは従妹。
- 35) 渋沢篤二(1892-1932)澁澤栄一の長男。放蕩息子であり廃嫡となった。栄一の後を継いだのは篤二の息子敬三である。
- 36) 穂積重遠「小石川の叔母様」阪谷希一編『しのぶのつゆ』私家版 1940年 15頁 2-3行参考
- 37) 秋庭千重子「母上様をしのびまつりて」阪谷希一編『しのぶのつゆ』私家版 1940年 55頁 2行引用
- 38) 阪谷希一編『しのぶのつゆ』私家版 1940年
- 39) 山成喬六。銀行家。満州中央銀行副総裁を務めた。芳郎の母方の従弟。
- 40) 渋沢元治(1876-1975)電気工学者。名古屋帝大初代総長。栄一の甥。
- 41) 有馬頼義『母その悲しみの生涯』文芸春秋社 1967年 192頁 10行引用
- 42) 岩浪稲子は貞子の結婚の際に北白川宮家から来て、有馬家の使用人となった。北白川宮能久親王の妾で、貞子の実母である。

〈参考文献〉

阪谷芳郎「家庭日記」阪谷芳郎文書所収 国会図書館憲政資料室所蔵
 故阪谷子爵記念事業会編『阪谷芳郎伝』私家版 1951年
 桜井良樹 尚友倶楽部編『阪谷芳郎東京市長日記』芙蓉書房出版 2000年
 阪谷芳郎『家庭の経済』大学館 1915年
 阪谷希一編『しのぶのつゆ』私家版 1940年
 阪谷芳直『三代の系譜』みすず書房 1979年
 佐野真一『渋沢家三代』佐野真一 1999年
 穂積重行編『穂積歌子日記』みすず書房 1898年

別表 1 阪谷芳郎家系図

